

Tuvinskij Nauchno-issledovatel'skij Institut jazyka,  
Literatury i istorii, Kyzyl, 1971.)

ハーロイェリクメコフ著

## アラビア語史料による九—一

## 世紀のキーマーク国家

林 俊 雄

キーマーク Kimak とは、九世紀中葉から一一世紀中葉にかけてセミレチエを中心として活躍したチュルク系の遊牧民であり、キプチャクと親縁関係にあった部族としても知られている。南ロシアのキプチャクについては、主として古代ロシア史との関連において多くの研究が(特にソ連邦で)なされているが、キーマークを対象とした研究はきわめて少ない。キーマークを正面から扱った研究は、おそらく本書が最初であろう。日本ではまったく研究がなされていないキーマーク史に関する労作を紹介することも意義のあることと考へ、以下、要約・紹介したいと思う。なお、地名はロシア語表記による。

序文(三一—九頁)。「研究史」。

批評と紹介 林

第一章 史料(一〇—三〇頁)。「この章では、三〇有余の史料について、チュルク(とりわけキーマーク)に関する情報の系統関係を明らかにしている。また、各史料ごとに従来の研究や訳註書をあげ、チュルクに関するアラビア語・ペルシア語史料の、一種の手引の役割をも持たせている」。諸史料の中で最も重要なものは、タミーム・イブン・ムハッフル(Tamim ibn Bahr)、『フアッワーダーブ・アル・アラーム(Kitāb al-ʿAḥād al-ʿArabīyah)』ガルディージー(Gardiz)、『イスハーク・イブン・アル・フサイーン(Ishāq ibn al-Husayn)』マルワジー(al-Marwazī)、『イブリーシー(al-Idrīsī)』の著作である。わけても、『イブリーシーの『ヌズハト・アルムシュターク・フアイフ・テイラーク・アル・アーフマーク(Nuzhat al-Mushraq fi Iḥtirāq al-ʿAḥād)』は、キーマークに関して最も豊富かつ詳細な情報を含んでいる点で、重視されなければならない。このイブリーシーの著作は現在十種の写本が知られているが、本書では、レニングラードのサルトル・イコフミン・チュエドリン(Saltykov-Shchedrin)名称国立図書館所蔵の写本が使用された。この写本は、クラチオフスキー(Л. Ю. Крачковский)によれば、『イブリーシーの自筆本からのコピーであるという。史料系統について言えば、キーマークに関するイブリーシーの情報は、主として、現在では散佚してしまったキーマーク(Janākh ibn Khagān al-Kimāk)の書に依拠していたと考えられる』。

第五十八卷 二〇九

## 第二章 キーマークの民族史上の諸問題。

第1節 キーマークという民族名(三一—三五頁)。カーシユガリー (Maḥmūd al-Kāshgharī) をはじめとして、すべての史料は、キーマークが民族的にも言語的にもチュルクに属することを示しているにもかかわらず、彼ら为非チュルクとする見解がある。グリゴリエフ (V. V. Grigoriev) とズーエフ (Yu. A. Zuyev) はキーマークを庫莫奚に比定し、グミリヨフ (L. N. Gumilyov) は、キーマークの支配氏族をタタビ (Tatabi 奚) 出身とし、被支配部族を西突厥の処木昆と考えている。またマルクワルト (J. Marquart) は、キーマークの由来に関する伝説 (ガルディージー所収) に依りつつ、キーマーク・キプチャク諸部族がモンゴル民族に属するという仮説を提起した。

第2節 キーマーク諸部族(三五一—四七頁)。ガルディージーの『ザイン・アル・フン・バル (Zayn al-Akḥbar)』には、キーマークの族祖伝説が含まれている。それによれば、キーマークは本来、Imi, Imak, Tatar, Bayāndur, Khifchag, Nilqaz (Lamiqaz?), Ajiaḍ(?) の七氏族からなっていた。マルクワルトは、キーマークの形成にタタールが大きく関与したと考へ、キーマークをモンゴル系とみなした。しかし、これらのうち後二者については不明であるが、その他は、カーシユガリーなどに依れば、すべてチュルクとみなすことができ

る。また、ガルディージーは、「夏に彼ら(キーマーク)は馬乳を飲むが、それは彼らの間ではクミズとよばれている」と記しているが、クミズという語は疑いもなくチュルクの用語である。さらに、Imak は、Kinak の語頭の K が脱落したものと考えられる (この現象は、チュルク諸語、とりわけキプチャク語にしばしば見られる)。タタールも、カーシユガリーによれば、チュルク語を話す部族であった。以上のことから、キーマークはチュルクに属すると結論づけられる。

## 第三章 キーマークの土地の地理。

第1節 キーマークへの道程(四八一—五三頁)。初期のキーマークへの道程を伝えるイスラム地理書の情報は、タミーム・イブン・バフルに由来するものと、ガルディージーによるものとにわけられる。前者によれば、まずタラーズから北へ行き、モユンクム (Moyun-kum) とバトバクター (Batpak-dala) 高原を通り、さらに北東へ向い、カザフスタン中央部を横切つて、イルティシュ川に達すると、そこにキーマークの王の所在地があった。ガルディージーの情報については、従来ミノルスキー (V. Minorsky) とマルクワルトによつて、二つの異なった見解が示されてきたが、ミノルスキーの解釈は、現実のカザフスタンの地形とはあわない。マルクワルトの解釈、すなわち、まずヤンギケント (Yangikent) (シルー

ダリア河口付近)から北東へ向い、いったん南へ下ってサルイス(Salys)川を渡り、再び北に向きを変えてモユンクムとウルタウ(Ultau)を越え、イシム(Isim)川をさかのぼり、アクモリンスク(Akmolinsk) (現ソェリノグラード(Tselinograd))を経て、パヴロダール(Pavlodar)市のところでイルティシュ川に出る、とする解釈の方が、より妥当である。

第2節 キーマークの土地(五三―六八頁)。九世紀中葉にかけてのキーマークの分布は、西はウラルの東南部からアラル海沿岸のステップまで、南は東北セミレチエの一部を含めて中央カザフスタンからバルハシ湖まで、東はアルタイ西部からクルンデン(Kulunjin)ステップまで、北は森林ステップ地帯までであるが、この地域にあまねくキーマークがいたわけではなく、最も密集していたのは、イルティシュ川中流域と東北セミレチエとである。一〇世紀中葉にかけて、キーマークはオグーズと連合してベチエネグを破り、ウラル西南部のエンバ川流域から時にはカスピ海北岸にも達し、一〇世紀後半には、キーマークの一部(主としてキプチャク)はシル・ダリア右岸に前進し、直接イスラム圏と接することとなった。

第3節 イドリーシーによるキーマークの土地とそこへの道程(六八―八五頁)。一〇世紀後半のキーマークの領域に関

する情報は、イドリーシーの著作の中に含まれている。イドリーシーが記している地名は、他の地理書には見られない独自のものが多く、何人かの研究者によって現在の地名との比定がなされてきたが、それらは必ずしも成功したとは言いがたい。当時のキーマークの領域を考慮して地名比定すれば、以下のようになるであろう。ガガン(Gagan)湖||アラコル(Ala-kol)湖沼群、ダルダン(Dardan)山||ジュンガルラタウ、ギルギル(Girgiz)山||タルバガタイ山脈、シャリヤ(Shariya)川||テンテク(Tentek)川、ガマッシュ(Gamash)川||イルティシュ川。

イドリーシーは、キーマークへのルートを三本あげている。(1) タラースからカルルクの居住地を通過してキーマークへ。

(2) アフシケト(現ナマンガンNamanagan)から北東に山を越え、チュー河谷に出て、それから東に向い、バラサゲンを経て北東に山を越え、イリ川を渡り、ジュンガルラタウの北麓ぞいに進み、アラコルの南を回り、その東岸に達すると、そこにキーマークの最初の都市がある。さらにイルティシュ川にそって下ると、キーマークの首都に達する。

(3) トクズグズ的首都タンビヤ(Tanbiya)(高昌?)からバフヴァン(Bahvan)(クルジャ?)を経て、キーマークへ。

第4節 一世紀中葉にかけてのキーマークの分布(八五—八七頁)。「第V章、第3節最後の記述とはほぼ重複するので省略する」。

第IV章 キーマークの経済(八八—九七頁)。多くのアラビア語・ペルシア語史料は、キーマークを専ら遊牧に従事する民として描いているが、一部の史料は、キーマークに農耕が存在したことを伝えている。そのことをとりわけ詳細に語っているのが、イドリーシーである。彼によれば、キーマークの土地には耕された肥沃な麦畑があり、稲作もおこなわれていた。牧畜について言えば、もちろん、馬や羊の牧畜がおこなわれていたが、それ以外に、牛も大きな比重を占めていた。イルティシュ川流域のキーマークのクルガンからは夥しい量の牛の骨が出土しているが、このことは、キーマークの一部が定着化しつつあったことを物語るものであろう。そのことを裏付けるように、近年の考古学調査によって、アラール地区では数多くの中世集落址や都城址が発見された。イドリーシーは、キーマークのガガン市に絹織物工場があったことや、また一部では貨幣も流通していたことを伝えている。都市の大部分は交易路上にあり、このことが交易と手工業の発達を促進したのであろう。「この章の内容は、次節にもある程度くり返して述べられている」。

#### 第V章 キーマークの都市と国家。

第1節 キーマークの都市(九八一—〇八頁)。「ここではイドリーシーの記述を引用しておく」。「キーマークの王は、十六の都市を持つている。……ダムリヤ(Damuriya)市は、キーマークの諸都市の中に属する。そこは活気に満ちた人口の多い都市である。ダムリヤからサラウス(Sarauts)までは北東に二日行程である。道は、耕された畑と村々々々を通っているが、それらはチュルク・キーマークのものである。サラウスは大きな都市で、強固な防壁で囲まれている。(都市には)勇敢なチュルクがおり、(彼らは)騎馬戦士である。……バンジャル(Bandjar)は、広大な、人口の多い都市で、様々な(氏族の)チュルク・キーマークが住んでいる。そこには、人数の多い軍隊と、その住民用として不可欠な量の物資がある。……アストゥル(Astul)は、チュルクの住む、人口の多い(都市)であり、(同市は)広大な播種地と豊富な水とを有している。彼らの生産穀物は小麦と米である。鉄鉱石がある。鉄からは驚くほど美事な製品がつくられる。アストゥルはガマシユ河畔にある。……ハーカーンの首都は、鉄門を備えた強固な城壁で囲まれた大都市である。この都市に、王は、人数の多い軍隊を擁している」。以上のイドリーシーの記述には、若干の誇張はみとめられるものの、他のいくつかのイスラム地理書や考古学資料などをも勘案すれば、彼の情報

はおおむね当時の実状を正しく反映したものとみなすことができる。

第2節 キーマークの文化(一〇八一—一二三頁)。キーマークの精神文化に関する情報は極端にとぼしいが、ある程度の推測は可能である。まず、文字について。アブー・ドゥラーフ(Abu Dulaf)によれば、キーマークは韋のペンで文字を書いた。また、セミレチエ出土の二面の青銅鏡にルーン文字銘文が見られる(クリヤシントルヌイ S.G. Klyashornyi は、九—一〇世紀の銘文とみなしている)ことから、キーマークは古代チュルク文字を使っていたと考えられる。次に、宗教について。キーマークでは、主として山・川・太陽・火などを対象とする自然崇拜がおこなわれていたが、一部ではマニ教(イドリーシーによる)やイスラム(考古学資料による)も信奉されていたようである。

第3節 キーマークの国家(一二三—一二九頁)。七世紀中葉に至るまでキーマークはアルタイの北方に居て、西突厥に服属していたが、西突厥の壊滅後、キーマークは独立して、その部族連合の中核が発生した。ガルデーイージはこの時期のキーマークの首長の称号を「シャドートゥトゥク (Shad-tutuk)」としている。八世紀後半から九世紀初頭にかけてキーマークは二派にわかれ、一方は南ウラルへ(主としてキプチャク)、もう一方は東北セミレチエへと移動する。八四〇年

にウイグル可汗国が瓦解すると、その支配下にあった一部がキーマークに加わり、ここにキーマーク部族連合が形成される。ガルデーイージによれば、この時期のキーマークの首長は「バイグ (Bayghin)」すなわち「ヤブグ (Yabghin)」の称号を帯びていた。九世紀末—一〇世紀初になると、キーマークは国家としての機構を備えるに至る。イスラム諸史料はキーマークの首長をハーカーン(Khagan)とよんでいるが、それはこの時期に属する情報であろう。以上の過程を図式化すれば、次のようにならう。

キーマーク部族↓キーマーク部族連合↓キーマーク国家  
シャドートゥトゥク = バイグ(ヤブグ) ハーカーン

ところで、『フドゥード』によれば、キーマークのハーカーンには十一人の世襲のアーミル(amin)が臣属していた。従って、ハーカーン自身の領地を含めれば、全部で十二の領地があったことになる。一方、イドリーシーは、キーマークの都市を十六と数え、そのうちハーカーンの首都を含めて十二都市はガマシユ(イルティシユ)川ぞいにあったとしている。この十二という数の一致は単なる偶然ではなく、『フドゥード』とイドリーシーとがキーマークに関して同一の史料を利用した結果であろう。

この時期にキーマーク社会内部では階層分化が進行し、このことは一方で遊牧貴族層の形成を、他方で遊牧民大衆の零

落をもたらしした。貧困化した遊牧民は冬營地に定着し、集落をつくりはじめた。集落は、キーマークにおける国家機構の形成、家父長的封建諸關係の形成、社会内部および隣接諸地域との交易の発達に伴って、都市となった。中世諸都市は、軍事行政の中心となったばかりでなく、交易・手工業・農耕の中心となった。以上のことから、キーマークは、九世紀末——一世紀初に原始的初期封建国家組織を具有していたと推定することができる。

一世紀以降、キーマークは急速に衰退していくが、その外部的要因は、一連の民族移動に求められる。その第一波は、クーン族の西進である。中国北方にいたと思われるクーン(Chin)族は、遼帝国の圧迫のもとに西方に移動したが、キーマークの領域の北部で、(キーマークに服属していた)カーイー(Ch)族に襲撃され、さらに西進して、同じくキーマークの構成要素の中にはいっていたシャル族(キプチャク)を駆逐した。そのため今度はシャル(Shar)族が西方へ移動し、シルダリア下流域とカスピ海北岸からオグリーズを追い払い、オグリーズは南ロシアと黒海北岸のステップに逃走した。このような混乱の中でカーイーとキプチャクが抬頭し、キーマークは、その内部的矛盾の激化ともあいまって衰微し、キプチャクに従属するところとなっていたのである。

以上が本書の概要である。本書は、著者自身も述べているように、その主眼はあくまでもイスラム文献の史料批判と分析におかれており、キーマーク研究の第一歩となることを目的としている。その観点から見れば、本書は、今後の研究者に多大の寄与をなすと思われる。

(B) Ye. Kunekov: Gosudarstvo Kimakov IX-XI vv. po Arabskim Istochnikam, Alma-Ata, 1972.)

E・アシュトル著

### 中世後期オリエントにおける

### 貴金属と国際收支

加藤 博

近年の西欧学界におけるイスラム社会経済史研究の進歩はめざましい。この進歩にとりわけ貢献した研究者として、パリ高等研究実習学院を舞台に活躍するクロード・リカーエンとエリヤフ・アシュトルの二人を挙げるのに異を唱えるイスラム社会経済史家はいないであろう。そして、この二人は互いに協力し合い、補足し合いながら研究活動を行っているようにみえる。その際、ここ数十年間におけるカーエンの関心が制度史研究にあるのに対し、ここで紹介するアシュトルのそ